

稽德編

十四

共成書畫冊

冊數	冊數	冊數
正編	正編	正編
附錄	附錄	附錄
年	年	年
月	月	月
日	日	日

280
7
1A-14



立事為事を所用し其れきとの儀より世に
名儒者ありしは其れを古例とす
世徳を御後世に傳ふるよりて為不充禮謙
の文も御食着きまれの儀
倣ふも御政事の節に及ばし平
生少くも御我意あり諸寺諸山神社佛圖の
礼守り勤行なり御城へ参りては其れ
舊式のを御立遊され只其れよりしては御
御後日光の御後より外に御原載はし

天道を御礼せされ御慈悲のりし其れ
少くも御我意あり諸寺諸山神社佛圖の
御此のより御立遊され只其れよりしては御
と其れよりなかりしと

佳き御下向

一

近代永太平の御世御仁恵不安んて諸家武
備お怠り其れ乃若物ちに令徳と貴し衣食在
完不欠とて武益代等御し先祖の功を忘
奇不費其の儀歎かむと
明君是と歎
く其れ思ふ士武勸の武と廟に敬意持儀不出

用き神(昔字れを織者の上神ともしう國の世
これとと

一 御候約少者諸受のし役人方平生を白山神
若用及つは體上神と上下着國信儀は國控位
出されは是不依く白山神と着之(ま)格の(ま)色
整りの志を神長を志一上着體上神とて上下
紋付不及は辰子の表付肩衣次上布より平
日志せしるを不辨子のくくハ志不脚あま色しと
之後三年の月辰辰候約少位出りは諸事陰約

國國の本飾の御候と着せしも多る有るなり是れ
少事との者御例を志格の着儀の候としし様
なり餘り(ま)きふ却て心一用し履後(ま)細
すくえ好儀の御少袖しとて多く志せし(ま)
善美に見えしも阿り花れともその御例元
をえ平生御儀相色をえ(ま)表向し役人合も
却て志儀ハ(ま)相不見えしとて

一 先々所代より度々の火災あり 唯君が御の外
少事後不遊され異事之事柄ともし余波まで 前

存を二統不承初の事世請ふ事とあり

一 御は並前(後)月御為て御承の事

一 諸段人(と)娘の私曲迷分有(と)

一 御後(は)河村信朝せんま(と)け(は)水(と)て

京(と)留(て)ハ(と)世(承)を(ま)る(ま)り(と)上(と)出(す)

右(と)取(世)承(は)之(と)事

一 自分(と)た(に)宣(成)或(ハ)私(の)い(と)ん(と)承(て)人(の)

意(の)事

一 何(と)も(不)承(自)承(は)亦(知)成(と)人(不)承(れ)世(承)

い(と)承(分)事

一 許(承)少(く)成(る)物(の)後(承)は(ま)る(と)不(承)内

或(ハ)ま(ま)い(と)不(承)内(世)承(は)之(と)事

事

一 取(り)有(承)と(不)承(は)之(と)事

其(と)書(せ)之(と)事

右(と)通(の)取(ハ)と(と)書(ま)お(す)剛(統)承(は)

む(と)承(り)の(事)に(よ)り(て)罪(科)承(は)之(と)書

物(は)之(と)承(り)持(承)下(承)承(は)之(と)存(并)承

書月令は是又右左也

丑国七月七日

一 虫解に於ては故有国七月七日所より所より
相属り書月

今夜日本橋より礼を遣り右へ航す心解る者
右礼より虫書解の功と相究り是を此處に控
文より海外より直訴海内あり

右報急友相懇得る所中より弱初也

国七月

一 享保十五年三月 咽若所猪猪とて是別也

ぬきとて一財ふり負猪一文猪り出く是の日
所に即秘花の一物の犬をり與んとて是怪我
阿ん事と即解つ意有て即制止有り小右の
犬不豚とて犬幸と幸則りも負猪不向て
一文字に記也。 咽若と猪ありて犬の阿ん事
ん事を恐れて是阿ん事と見たりて即解るの
内より一夜信濃守嫡子一夜大書也一とて馬と
一まん小書也一らと有り去成事ひ有りて彼の

猪と目あふぬを不可得て犬の志中射通し
より痛もなれん犬は即時不倒して死す猪は
泳ぎてくちゆく所を 明君通せしと 上意
阿しうも瑠子の丈夫ハ聲をけ返返して下と
明君御後方イ松平左陽守より 新との少爺とい
沙の自ぬち 猪も猪も泳げぬ者にて立前も登
殿少事ぬて後上夜守遊ちるいといし秘蔵の
犬と射敷し日六を意すなり(まじり) 細ひくまふ
明君上意ハ大守夫とあつといハ犬と射合を思ふ

此は猪と射敷せんを欲しそ無得ぬの跡も其夫
誤てぬ中もいふは是犬の石運といふし何
そを意不及もんやとの 上意なりしハ大守も女
堵の思ひと成せり誠不君子の一言も萬世法則
なり寛仁の御意量の程感しむるをいふなり
一 享保十一年七月七日新内閣徳川御孫守邦
隆七夕の沙礼堂城の御馬不乗り一橋沙門の内
沙番所の前向ひより鹿馬しよは一両玉撞を
少く能く事なす民家物と宿より取り寄る

御札と申すは石見書中より六世と相尋りし由り
又、彩ひ取載海防く多允急友御札不八及は
少中少少少と格別之事瓜石見書系録の
番次言力平八前へ谷代とて表十部と云御札
中より平八前も菊松曾て取くを格別御成
石見書之御札とてとありより之は後石見書へ
取ひより赤白草の墨鏡を包むと云御札
右のよりとてと依りて取載し之はも若
代とて御札とて之は後本復の石見書へ

御札とてとありより 明君の御札とて 控り御
ことし

一 明君若草御札 御成とて 成りせしれは長門
長刀指乃御少人 御場跡之急少御札
少ありは之 御天窓之御長刀の鞘前より御外
周章にて踏踏を多御少 御成の 上意不月有は
見取ふ不波を御少の御事 少と 大島若御 御成
御少 御少御少 御成とて 御少 上意とて
早御御成とて云々

一 明君のまゝに死別し、沙夜をきれるは、空水に伴ひの
 以て、沙夜形不出火をこれに、明君は、自所沙下
 知事、火と沙夜をきり、これに、不定火清、追及
 官角の敷と、石道、早迷、沈着、御門、不、あ、り、ん
 明君は、是と、御門、追及、これ、御門、追及、これ、り、ん
 風、水、静、り、て、火、勢、を、弱、め、れ、り、外、の、人、敷、と
 昔、より、及、び、火、子、勢、を、是、に、清、ら、く、早、迷、り、ん
 百、石、不、信、を、これ、に、き、り、ん、追及、不、抽、前、御門、追及
 初、向、り、ん、若、火、水、成、り、ん、初、向、り、ん、若、火、水、成、り、ん

一 明君のまゝに死別し、沙夜をきれるは、空水に伴ひの
 以て、沙夜形不出火をこれに、明君は、自所沙下
 知事、火と沙夜をきり、これに、不定火清、追及
 官角の敷と、石道、早迷、沈着、御門、不、あ、り、ん
 明君は、是と、御門、追及、これ、御門、追及、これ、り、ん
 風、水、静、り、て、火、勢、を、弱、め、れ、り、外、の、人、敷、と
 昔、より、及、び、火、子、勢、を、是、に、清、ら、く、早、迷、り、ん
 百、石、不、信、を、これ、に、き、り、ん、追及、不、抽、前、御門、追及
 初、向、り、ん、若、火、水、成、り、ん、初、向、り、ん、若、火、水、成、り、ん

一 明君のまゝに死別し、沙夜をきれるは、空水に伴ひの
 以て、沙夜形不出火をこれに、明君は、自所沙下
 知事、火と沙夜をきり、これに、不定火清、追及
 官角の敷と、石道、早迷、沈着、御門、不、あ、り、ん
 明君は、是と、御門、追及、これ、御門、追及、これ、り、ん
 風、水、静、り、て、火、勢、を、弱、め、れ、り、外、の、人、敷、と
 昔、より、及、び、火、子、勢、を、是、に、清、ら、く、早、迷、り、ん
 百、石、不、信、を、これ、に、き、り、ん、追及、不、抽、前、御門、追及
 初、向、り、ん、若、火、水、成、り、ん、初、向、り、ん、若、火、水、成、り、ん

困繞せし中より 明君より 諸人の謀り違ふ
 京見者物れを御所の長六人者餘り有りて
 壹方御威の首を右乃けし事十六人の流絶と
 扱さるる御心を振く事こそは事行遊され
 暇より見よふは只少林採我を扱せり遊遊不道
 と又御仕奉の以也指矢と遊され京御一肩
 小六五年世りし也

一 享保十三年の以 明君御所(御威の長或百
 世の家より小児の泣聲とせせしれ何處不泣か

取り能ふと 上意不付御座候事候も此百姓
 して六 和伴世良夜候事なるも今日御威の
 少沙匠と取り是能も外へ遊玉海に上意と
 此と色く昔候とも取座を可勿御座候し
 此取付候とて六七を命を早速上意不達し
 此を夫え不使の事之 何事か指し刀を裁りせ
 事との 上意とあれは 少庵良則 御刀と持り
 彼の家より御所候の 上意有りて是件御所
 刀と小児の泣ふ事と事とせられん 瀧物より 威徳不

てこれ懇懇忽散して病病癒ふ令傳せり家
内にも及ぶに信守の貴族は不所意仁と感懐せり
さるるに少庵は長女と病業令癒の服言せり
されども白浪云はれりさるるあり

一 享保十三年の夏福屋不為庵守家智月もすまふ
不為は似せふ年十六歳少年家申一程とてに
氷と云ふ死しとては其時留所の橋邊屋申す
不為は其方ハ不為庵守 孫子不為庵との申す
柳屋は銭ありと云はれは不為庵守を也少庵と云

附 上意不為彼ら定程春日病事ハ新ハ希なり
為義の少庵と云ふ者のはる所ハ在り
やうはすくやうを後と云ふ也 不為庵守ハ安心行
心長不為生後也家老ともハも急度すく中
然之きのハ 柳屋は陰屋也云ふハ 新上意ハ
説く少庵ハ又 上意と云ふハ 不為は福屋家
の之後大早の甘雨と云ふハ 心地すくすなり故と
傳言と云ふハ 享保十三年申す 不為庵守年去所同
此言義不家智はれりさるるあり

一 是利の量校不審板の十二經註疏是河内と
 享保十六年少明(蔭生 惣倉)小佐有之れ右の
 内之經篇於左經意子抄出(七經意子序文補
 遺)と名有之れ全於三十二冊(後朝)流之る之れ
 彼國之(不)宋令の多礼石五百年末件の古本
 結果為子も右古本と見之れさる之の不無
 度日本より抄傳(一)事 亦とも何き日印の
 卷之とあり右の序(不)室新本と蔭生と
 是(不)西(不)佐有之れり也

一 享保中異より後(不)所(不)六諭(不)行義(不)外(不)の
 不(不)民(不)鄙(不)俗(不)の(不)爲(不)に(不)五(不)倫(不)の(不)道(不)と(不)教(不)化(不)せ(不)り(不)の(不)書
 有り(不)統(不)を(不) 明(不)名(不)を(不)し(不)り(不)死(不)用(不)ひ(不)て(不)世(不)書(不)の
 訓(不)與(不)と(不)蔭(不)生(不)惣(不)倉(不)の(不)小(不)佐(不)有(不)之(不)れ(不)書(不)歸(不)へ(不)極(不)り(不)佐(不)有(不)
 ら(不)れ(不)著(不)く(不)世(不)之(不)流(不)布(不)せ(不)り(不)又(不)室(不)新(不)本(不)小(不)佐(不)有(不)
 和(不)文(不)不(不)澤(不)せ(不)り(不)の(不)名(不)有(不)之(不)れ(不)佐(不)有(不)之(不)れ(不)と(不)是(不)也(不)
 石(不)川(不)勘(不)女(不)相(不)徳(不)言(不)又(不)板(不)行(不)出(不)来(不)世(不)不(不)流(不)布(不)せ(不)り(不)
 元(不)文(不)二(不)年(不)西(不)五(不)新(不)詔(不)不(不)少(不)小(不)佐(不)有(不)三(不)組(不)佐(不)有(不)之(不)れ(不)
 初(不)新(不)詔(不)爲(不)改(不)す(不) 松(不)平(不)権(不)の(不)佐(不)有(不)之(不)れ(不)長(不)徳(不)改

とも新撰少不致合をりしとて御命は少
小性組序高氏佐世右藤尉支配の御次より諸保
司家考と柱と物組以(御前少於て佐世は長
上意の故と承達)臣等より言ふに新撰高氏
柱と物組及佐世等よりおのり御前並と遠さ
之は後所よりありしとき言物組に(一)より
西序九(御礼)とて中殿は西序九者年考
小出信徳と英貞共佐世と右足達(少)御前九(一
中束りし時と明君は考れそれと我言(遠)ひす。

趣しとの 上意少く空前考ありしひ之におもひ
之故も及ぶ言物組に事なるおのり
御前少考と佐世と柱と物組以外何より
よは御次(何云乃御前)於又承合する定ぬ
なまに言考考佐世の故とて右の考り承達
少く御前と考ひしとて(一)も何より(一)も御前
少考何事考りしと承の考書ふ

及世考(一)遠ひしとて(一)も御前
よ(一)この已悔は何と承考考り

物と可何法せり 細文元文五年小御り

大御言極所諸の物所多^一行及後後行^レれ

しゆ^一言^レ事^レ身^レ言^レく^レハ^レ何^レ言^レり^レあ^レ言^レり^レかり

つ^レむ^レ寛^レ仁^レ言^レ承^レの^レ御^レ聖^レ傳^レり^レあ^レる^レ言^レり^レと^レ所

法^レも^レ是^レ右^レ言^レち^レる^レも^レ善^レ鐘^レ元^レの^レ言^レ録^レ也^レも^レ是^レき

く^レと^レ物^レ後^レ也^レと^レ福^レ言^レ外^レ言^レふ^レハ^レ増^レ乃^レ増^レる^レ生^レ質

少^レ月^レ之^レ言^レれ^レも^レ内^レ言^レに^レ言^レち^レる^レし^レと^レや

一 明^レ君^レ御^レ聖^レ傳^レと^レて^レ而^レ前^レ也^レと^レ殿^レせ^レれ^レ也^レ言^レ厚^レ澤

寺^レ言^レ新^レ之^レと^レし^レふ^レ烟^レ中^レの^レ小^レ細^レ乃^レ板^レ揚^レと^レ也

幸^レる^レ也^レと^レし^レ後^レり^レ増^レされ^レ也^レ板^レより^レく^レて^レと^レれ

より^レ上^レ意^レ並^レされ^レけ^レ余^レに^レ増^レく^レ増^レされ^レも^レ板

の^レ増^レく^レも^レこの^レ上^レ意^レより^レし^レ後^レ也^レ方^レし^レ也^レ是^レを^レ板

世^レ前^レハ^レし^レ代^レ也^レ伊^レ言^レ生^レ乃^レ支^レ能^レ不^レ言^レり^レ双^レ言^レし^レは

し^レ如^レも^レな^レく^レ事^レ跡^レ也^レも^レま^レす^レより^レ言^レふ^レま^レき

や^レ諸^レ向^レ中^レ後^レされ^レし^レと^レし

一 或^レ何^レ向^レ方^レや^レん^レし^レ後^レ也^レと^レて^レ威^レせ^レれ^レ也^レ後^レし^レ依

の内^レ也^レ此^レの^レ後^レ一^レカ^レと^レ増^レく^レと^レ明^レ君^レ御^レ聖^レ傳^レ也^レ也

これ^レの^レの^レよ^レの^レハ^レ増^レ高^レの^レ言^レち^レあり^レと^レも^レと^レれ^レなり

あり古来より有る不格染たるも用ひし
わづり之れを又尊もなき事なり折ふれてハ
有るは故きくむまり予り留御指物と業と
はより一分乃樂とせとありしも是もされ
とも居候の事とていふ一治世不礼と忘れしる
は留御指物よりありし物とされハ人教とをひ是より
多の人数不格染へるは又諸士乃染物と打也
射也有知立切を忘りし令痕衣服とともは
第一旗本の古とより武切を我前より阿つるを

賞券一外様不格染有る外も我治元初事之様
小苗着の者とも唐衣我の是も同一事なれ
は通智の事一紋付の衣服好貴小事尤も
一々居候の阿つるされも是者骨髄不徹一
はくくははきなり然れども是もなつるは
なり中一近奉武備垂く大小名諸家申り
ありしは松山殿水小女一酒色不溺れ不経羅
錦縞とてひて樂と專し一松塵との一第一
として武士の習ははれもなかり公家侍所人

の如く小氣弱なるを来りゆく亦武備を以て
護邦の比後にもわがは是れ威中いつらき事
与れども予の武官と好む倭約と用ひ吾國の貴
なく及び是れを吾政庸臣と施さんと欲するん
なり是れを以て國々の諸大名漢代の大小存
降ふの甚く廢死精將是阿る也之數と其の
諸士とんけ別腹と初んぬるなり是れを以て
と思ひて其多く氏の國家とすし五件少諸
士をも世傳武官と見ふ入んと思ふ之し然るを

之人を以て存せんは遠く上下相せは是を用
何の用も之もや然れを君臣水矣の志を以
時と玉領の家老一徳也きその事之家不
傳子なり玉不長長なきは之の愚昧許さる
さる玉家の傾廢と之の事堂とくはりぬ
なり一忠臣を以て惜まを諫争して故と之を
守り吾臣也此極と食むそ之徳と忘るは武士
の非を初むるの甚く是なりそ玉之家の家長
以死んは之も之の事天下の道徳と銘く行

何れ改事と忘れを敢て老不及といふは
新カ表入を諸氏の困窮と心ゆく改平年積
乃不償釣文を諸氏の貴る事と初めせり
それと天下の諸人皆を思ひ及なり
諸君の吉山家の盛衰家内の位善と居る
不知く城下の事之れも及ばぬ相聞を
小五道子仲ひく天下と堂物と心より
去る後、且本籍本の諸士馳乞り
慶と智少り予、心成花より

世間の財を其の風にも
なり所不償釣文諸君の困窮と心ゆく改平年積
乃不償釣文を諸氏の貴る事と初めせり
それと天下の諸人皆を思ひ及なり
諸君の吉山家の盛衰家内の位善と居る
不知く城下の事之れも及ばぬ相聞を
小五道子仲ひく天下と堂物と心より
去る後、且本籍本の諸士馳乞り
慶と智少り予、心成花より

厚き事と 上意有り 而れて 隠使等 取り
此等 大綱言極へ 上綱の道へ 其も 若く かな 方
者や と 伺ひ 而れて 抄へ 其意 止まざる 亦 非を
誰へ 侍り 厚き 旨 上意 ありし こと

一 明志元 御大願 とも 八 沙存 とも 少く とも 御願
沙好 石 とも 是 齋の 血 願 とも 中 生 血と 齋と
は とも とも とも され 御 若 御 供の 書 以 心 下
御 願 及 齋 とも 右 齋の 血 願 とも 下 並 れ
とも 齋 とも 是 向の 御 願 名 抄 御 願 抄 へ して 通 じ

す 酒と 齋 とも 八 元 とも とも 及 八 尺 あり とも
齋 とも 振 あり し 中 あり

一 諱 イム 此 文字の 倣 とも 世 とも 昔 とも 人の 在 業の
事 少 固 以 末 事 之 明 君 上 意 進 され 心 とも 名
とも あり へ とも 自 願の 溢 号 の とも あり して され 心
在 業の 事 少 とも 意 進 遠 へ とも 名 去 亦 依 へ 大 綱 言 極
家 依 の 御 在 業 進 へ とも され 御 在 業 の 字 と 進 へ
られ とも 御 願 齋 是 向 の 諸 大 名 あり 右 沙 腹 腹
とも とも 沙 元 中 若 年 亦 元 御 願 齋 へ の 使 志 口 上 也

おぼく御津と氏中三氏御名の字並せしれ忍
悦の口よりとそ

一 禮儀類典の條と水戸の御家と書末に書り
楚布一々年元日より始く御想武と書記
と書り明君の御代一社と書り尤楚書
一社伊路と書り一社御進書と書り楚別書
書りの御文庫と納と書り水戸の御家乃
條と黃岡老金御武と文備乃楚書と書り
より多く御家と記録出来 公義と書り

右記録前と彰考館と云ひ是と司の儒役と總裁
とて今水戸の建三氏世御大目一々年一
前西とソと 明君類典乃内侍御紙と云
御不審の條あり水戸の儒役楚外終と書り
由より

一 楚府政事録の條に楚別不於て慶長年中
控段極少立城申林送春の日記ありしに
春自筆と書り楚書一宮原と書り 明君林
大書と書り楚と書り御一楚書と書り

御稱史少テ 邦史書物居上ト云々

権説極テ 魁同ト 三體ト云 泉流ト云 況少則不

又 中流長新ト 御見立 遊々然ト云 河ト云 兵令ト

少 海志 遊々然ト云 又 書少テ 始テ 少海志

遊々然ト云 林家 御近 遊々然 秘授信

居上ト云 上書是 何リト云 右 録ト 海志

世 不流 居上ト云 家 記 傳テ 流布セリ 林

家 傳 傳テ 道春 此の 書 儒家 書 曾 啓

氏 録 法 亦 道 云 以 来 何 の 事 公 公 秘 傳 也

日記 致 書 公 秘 雜 纂 道 春 自 筆 少 云

書 姓 今 小 少 子 才 代 出 鑑 公 義 中 用 事 也

お 初 大 坂 陣 の 初 大 佛 渡 大 祐 出 長 老 四 郎

少 年 書 上 一 書 也 道 表 自 筆 少 云 右 の 書 中

あり 出 事 云 云 瓜 瓜 今 世 不 流 布 也 云

一 御 代 始 林 大 學 以 來 其 外 門 者 也 御 宗 八 石

出 此 謙 叔 亦 傳 也 道 外 御 傳 者 上 流 御 宗 也

也 御 宗 亦 御 宗 傳 也 藤 樹 上 流 御 宗 也 云 云

其 事 是 何 瓜 瓜 少 子 刀 等 也 瓜 瓜 亦 書 少 秘

為遊され少性元門不任月々也

一 神田橋 乳鏡の長 本傳より三月漢院 早來 菅原任

少孫不任由され後右橋出来の徳少孫を好む

愛水神和泉守言上より少孫右少孫度礼

少孫月吐味信成いりし出来信より少孫

明君國せられ甚序控候宜くは橋菅原不礼

とはとの 上意言て候由され少神田橋の

候に性束然き、所少て橋ありて人の難候に

不されも早速勉行て八寸のま前二年生候約

之間をえ 何のゆえや 少孫の時長 周と感て人の

難候とも せうあう 少孫屋き為さうとせやあう

何のゆえの位少て出来候

一 明君御病我として 意方 神威をて 還原の時

平川より 了せられ 少孫の書き 此少孫

下島仕候と健士の者左候と 上意遊され少孫

我少の少孫を、希まへ 上意をとり河りて

為さう御書公別して 願をて少孫の位候

りり少孫治まり

一 御先代より御番流ら馬も程の儀中一の儀不
 少も 明君御代より引く武備の廊に
 流く御番流る取の御く是のの上此上此處中
 上流是あり宿の首は夜そくち助上流十中
 の者御前不於て時彼一重の流儀あり平
 日も騎射度く上流とては應災黄令三夜に
 是よりより此先も小笠原徳政御指南は有是文
 之度毎少時彼に載る事始し初の前は為て
 対ひの此島の者い御島とては極多なる御云不於て諸

島の前島と廊のり申り能者い御供りとして
 御威先少く島と対留あり是又流少し應災と
 して時彼一載流儀是ありは流儀不不し
 是のそ父の勅不流るは島入位有る或は御側
 近く御守云御不性少小納すは云されは我
 以て小笠原の御は御の外流儀と廊としてや
 一 明君御代昇格されは是も是も少し此氣
 として成るはこれ或は御守の上百羅屋一取せ
 られは是も上意不助と対せりといは御守の御威

之の源流を夫も洞人の所へ屬す又考ふん然厚
而れも即ち不念對子の西くお端的に澄然と然
應ふも亦即ち即ち應ふより一々選法の後少廣
とて黄念三故く乃至れ一りく不念の的を杯
後よりれゆを畢竟武備と油刺法とせき即廣
意をどのつゝ武備意の事とすしとや

一
紅州大納言光貞卿御歴女遊され葦山云とてなり
一以或時の少佐宛の御應ふ少子梅方と云集
られ小道具と少九寄少中のみと遊せりとい

一
首少終く少直と云々と河し河少一男能教公と即
少二男内宿次校少三男之孫臥校少一平光此目
の節より道具と少直遊され此等も 明忌不
少直曾少ていさ少初少の少付有り一り終られ
少光 初と此不登少は民堂少所直を修られ此は
葦山云少閑遊され思ひ切るる堂を少大校の
御卷量と少稱英遊され孫の少少終應能と
少直少御之極入遊されありと
一 咽喉上喜ふ人同一生の勤も忠存の道之を廣く

美言の教も皆忠存の爲なりし忠存と勅じ
思ひ主君兼先祖父母の恩となく忘るべし其恩と
志す好も亦不忠の道難ふあやとのやと古人も
宣ひしは他は是れを人國の苦み飢寒より
是れを是れを一言性町人なると忠存とわくは
貴と好も飢寒をなるとん為なり家國の勅他
りして飢寒ふ及ぶ者多し飢ふ武士は色
なると飢寒の苦みなく父母妻子より忠
ひ家来と傍ひ安樂ふ善行は是れ主君兼先祖

父母の恩佳ふわくは忠存と常小忘れぬ忠存
の勅急を爲すやうなり古老の勅懐ふ毎。食ふ
むは衣服を忘る飢ふ主君兼先祖父母の恩
徳と思ふべき事なりと柳菴夜話下回

一
又上意ふ主君兼先祖の勅を厚恩と報せんと
心付し主君の爲す思ふは其主君の爲すを
なると我心のこくをなると主君と恨み
朋友と隣り非義の争も爲す友に却て主君の
心より主君の朋友より此れ非を止し家と

先少有り申一之君の恩と報せむにまよひ
よのハハマテ立所せぬとも切しと石豆のん
なくと恨事事何一自ら天理お付て所常冷
心も安らふし誰と知りし事なれとも年若き
者もハ能く覺悟せし

一 又上意不存と勸者有誰一之君の親不
へく思ふよのなれとも道理と辨て一概不
氣不入腹と思へし少り致事といひをて言
思ひとて下飲不君の心不肖と人の淺りと故

事毎一其後故とよく初の所の行海と願と相
り少指出きり實故のなきと感せし

一 又上意不親不孝行はる事とて道理高くまよ
事なれとも畢竟親不孝等と能く親の心の
安堵と自ら小所と持中肝安をりし一此を本
とて一切の存行と存らるる事とてよく
初の悪行故不孝は凡行端安致若生を能く
父母の心を安らふる事との存らるし

一 又上意不存と申と子のこく憐れやハ父と親

のこゝ 敬() 朋友の交りハ心付の事然れ
をこゝにもなるぬれども是等の間ハ心付の交
事有らざるを踏く多ク其道不向ハ石使の
事有りともども未だ情志して漸の志を以て志
有り

一 又上意ハ夫婦の間を以ての子より起りて不和
少故ハ互ハ情志の心付有らざるを以て女道徳
固キとのを教へん長ク教訓して夫婦の道
全ハ是れまゝ之夫婦和合せしむ一家治る也

忠存の道ハ心付とのや

一 又上意ハ妻と離別を以て人倫の大變ハ妻の
行跡也友双方の親類是跡を程の事向て離
別しては苦ハ心付在るも之ハ離別は人
知らば

一 又上意ハ朋友の交りハを急の心と忘るゝ人ハ
為さず情せてを急の心と忘れ礼の事有付て
初の親友も跡を不なり不意ハ親友ハ其友ハ
との之礼義ハ友情ハ情ハ不也ハ喧嘩ハ痛キ也

去へまわう平一但一自州不非義なればよき
非なる義深し州を控ふる阿る是を武吉の
なすひかれと考判のゆかり

- 一 又上意不朋友の心と能察して去者の短少を
言ひて帰ると信をきく者よりあま事之信也し
- 一 又上意に上の事批判しては朋友のゆかり
ゆるしん愚多の者と阿をう人を信也しては
阿をうて不足を阿をうて者も阿をうて
能信也し

ひ

- 一 又上意不短氣故者は事と信候し是と破り
多一我中質短氣なりと知ては法を操忍の
心と心ハ種やて信也し一短氣ハ左方我信より
出るとの有り存人の素骨を是る事事有り
- 一 又上意不人隱密なる事と足同へては人の秘氣
その如と可なりと信
- 一 又上意不能知不約未せし事も要事へては成
り後と思ふ可と乘尔不約未せし事
- 一 又上意不無善者、時一一旦の寵也不迷ひ理非不

辨ず是非我のこゝ小せんと思ふ事あるを
なまふ所を父母兄弟親類朋友の異ならずて
心と直申す。富強不立海も何り又信強くして
異見を以ては慈念を有り所を失ふ事有り此
時一生の去るの深沈なり一旦の怒りふりては心
母れ恩を忘れ一家の危を依て申す

一 又上意不財宝を貫ては恩を感ずれは異見
の恩を思ふを申し一言して一生の事のため
誠中あつたるれは異え程の事なりと云ふこと

思ふ

一 又上意不武藝と習ふ事器用不器用のれを辨
上まふ事有り。此等思ふは武家の家業なれは
習ふ事有り。叶ふ事と思ふ事。勤へるや

一 又上意不命と控へて。時不臨て。一旦も川に死なば
義と思ふ所有り。勝負不かく。危くは義中書
後々も勝たぬは。義不南れを。願て。まはし
何れ

一 又上意不學問と。是を志存の道と。勤へる事有り

辨ず是非我心のつく小せんと思ふ中あつたの
 なまじ何れ父母兄弟親類朋友の異ふよそ
 心と取申す道不立隔も阿り又信憑くして
 異見を用ひて懸念を有り所を失ふと云阿り此
 世一生の幸中の深沈なり一旦の怒りふりて忘る
 母れ恩を忘れ一家の存を慮る事と

一 又上意不財産を貫てハも恩を感ずれとも昔
 の恩を思ふも少し一言して一生の事のため
 成りあつたものを是れ程の事と云ふものと

思ふ

一 又上意不武藝とおや中器用不器用れを辨ず
 上も下も同じく思ふ所は武芸の家業をれを
 習はせしむ叶ふ事と思ふも勤む事や

一 又上意不命を控へて時不臨て一旦も川を渡り
 義と思ふ所有り 腸腹不かくる處は義不背
 物も物不わすは義不背れを有てもさけ
 阿るは

一 又上意不學問と云ふは忠存の道と勤む事有り

詩歌作文をうめて忠孝の志なき者こそ吾等の
の學問なる所なり

一 又上意に當りて人々此の程とありて有り
たりて禮讓を以て事なり然るに學問をして
言慢なるは此の程と知りて應有之是信不
し論語程の論於初と云なり

一 又上意不學向して人々此の事とありて
隱者の礼儀と云ふや多し言而名の失せて
實の道理不肖なり世の事と云ふは此の程と

をのつゝ忠孝の勸ありそりやと云ふや

一 又上意不學といふ思ひは言ふ多き無ん
お違ふ何れと云ふれを言ふかゝりて有り
者なり人々此の事と云ふは此の程と云ふ
也

一 又上意不學の位極しは言ふのよも有り
たりて辱ありて我位極しと人の位極なきを
たきあり初辱あり人の位極しと我身不
見たりや

一 又上意に苦勞を堪れんとされ義理を肯ん
 而後其意を遂げりて人の苦勞をも我身に及
 せしむるを義おけり人なり神災せざるを
 又上意に由任ふ番代りおし出せり人なり
 ちや出せり付せしむるを心懸けし物なり

早もれんを事なりて不を毎し
 おそくしていそくみちん若くき

一 又上意に口服家の油を拭ひ法と拂言ひ他
 寸へくは古元の油を掃蕩の事なりて急ぎの圓ふ

とちりき事なりとありと常に世にあらん
 かへし

一 又上意に家宅清道具衣類おを掃より中程
 まはよりを取ふことよりわかれん

一 又上意に人馬を掃蕩せしむるに武士の勅を
 かりてきりきりと思わさるる掃蕩を好むるは音角
 の費となき凡そ掃蕩の守りし候物とて六
 只我身の言自他を掃蕩せしむるにあり是則是なりと
 知り候なりし物なり

事これぞたふ不仕せり可き事

毎てそりる、州一を せし事れ

一 又上言に家と治をも金限米穀のものと知るはして

計りたる事之 然れども金限米穀のものに心不

勉て世の誘を人の苦をせしむるより大にまきあは

非我なり

一 又上言不満とて思案をた 我為不匡の意きと

思案をへるに 我為不匡なるは 何れにぬと思案

は 一

一 又上言に義の身 仍不初より 其の件と思案し

意より事仕指し 然れども 十を不すと

思案のこ 他は 此も 不仕指し 何れとありと

古尤の物語あり 誠不思ひ 尚も事 ありし

一 又上言不面 白きこと あり 不 慮 せし 妙 用 あり

豊 懐 せし

一 又上言不河 事と なる こと 尤も 其の 事 を知りて

能く して 百 選 あり 事 を知りて よく 治 せし

之の 成 弊 なる 治 あり

一 又上意人の難いと活むと思ふのハなきぬかし
人小立ひおせんと思ふのハせぬかし

一 又上意小人も大の理を辨ぬ者なれどもよく云
教へ侍ら座一 飢寒を察し 病氣を憐れ難儀
と救ふよりと患むの要あり 短氣を辨ぬ者
酒を辨て 身体をきき 者も早の暇と世をさし
そ外悪もハ小及を且下人と抱ひたる目利何の
座一方と掛身り 重きとまで云せぬくせ者
と知る座

一 又上意に而意の幸得れも而意の災ありといふ事
得る事少く有との之格別下 垂成物と當て
海小難儀せしとの 是何事か 流しと云河り
世道にハ流るに流る座

一 又上意不忘者の道と勅といふ事あるは河老也
察ふ事少く奴事も教ひ慰む座 世の清り人の善
と入りぬ事か 我心のまに遊具とな火火而也
小阿の以徳在る所 家を破るの基はと知る座
一 又上意不常不縁の用意ありとのハ急りの何り

事かぬとの之詠察不意くハ先業内とて見え
差入一業内を知らされ不意事の附不取是と
有との有りとも老切の者物成なり

一 又上意不先徳不我切歎是あり者の子孫に不
念如とて根不福を削る有り民亦自分の老不
信せて言福をあらふ有り

一 又上意不あはハ大切の役成なり之人の服成不違ハ
る有りにこの人孫成道と朝夕ふりて他の物と
清き有り相成なり其持中一かこれ死下

相成て賜せりとの有り老成れと事相成花
解の付と第一の取息有り常々依性具成負の心
なく勸芳実なり者亦成成ともや何之有り
跡の談も有り異見と中人今て一不執り
一むへ一取ハ是一身の成有りとも古成の空
ひつれも有りとも不意有り百成なり

一 又上意侍と私欲の方成なく歸りて礼成
と今今と一文字あり吉六士の口と書き志と
士の心と書き係分明有り

一 又上意不從彼ふん友馴るも人たりの從彼と孰
も人急り不怠く出入る人養能ある人少
常、直身不物産と一國並度學と成也し
一 又上意不昔勸友武切力養れ何る老上阿り着き
今、武切物産を不怠く一節老上治て曰某着
何ぞ指する武切をす一天性也彼何りてふ
よく思ふ所、所不切の働も、彼を養れて思
はうの養れと仰る人、古也也敬あるす
何ぞ了し

一 又上意不常ふ人の善惡を見て 我財の養と

是し古也也

かみ山に志の志くらさき見えて

我財れう古く介らうに

師 我財心神の法をつくる如や

こゝろの水のさめえうのまね

唯れ痛きなりせめそく月々

何れ 三つひかへて見えても

初らるる心とあつて何れも

上巻の巻末あり

徳編卷之十四終

